

## 日本語訳

授業は英語のみで行われており、授業の課題にあたるのは英語のエッセイの部分までですが、INFOE誌掲載のためさくら本人が日本語訳も添えました。

高校二年生のさくらは高校生向け英語選択クラスの一つ、Creative Nonfictionを受講しました。このクラスでは先日、雑誌 New Yorker に掲載されていた Jerome Groopman の文章を読みましたが、それは彼の医者としての責任をテーマとしたもので、患者に本当に必要なものを提供することの大切さが述べられています。同様のテーマをモチーフにエッセイを書くという授業の課題で、さくらはお父さんが学校を選ぶ際に直面した責任について書きました。

# MEMO

## エッセイ さくら

自分の子供の話になると、父の目は優しくなる。

「自分の力で自分の人生を歩んで行くことができればいいんだ。」と父は言う。

「もちろんいつでも父親として必要な時にはサポートする人生の案内役でいたいが。」

彼は今までで一番責任を感じたときの事を語っている。思慮深く、温かみのある声で話してくれた。

私と私の姉のために下した決断の中で父が一番悩んだのはどのような教育を受けさせるか、という事だった。

子供が幼くて子育てが単純だった時を父は思い出す。「赤ちゃんだと可愛がって、世話をしあげればいだけなんだ。それですくすくと育つのだが、どんどん大人に近づいてくるとその子の人格形成、人間としてどういう人になるかは親次第だと思う。」

静かな声で彼は続けた。「子供の成長はいろんな事に影響される。その子に対しての親の姿勢から、住んでいる場所まで。そうやって考えていくと教育がどれだけ重要かがわかるだろう?」

「私が思うには子供に一番大事なはその子にとって自然に育つことだ。一人一人個性を持っているし、才能もある。世の中でするとこれに重点をおかず、みんなを同じ型にはめる傾向があるんじゃないのかな。それだけはしたくなかったんだ。」

だから私の父は千里国際学園を選んだのだ。生徒のそれぞれの個性を尊重して、それを全力でサポートするようにしている。生徒一人一人を一人の人間として見てくれる。父にとってこれこそが理想の学校だった。

学校の第一印象を聞かれた時、彼は広々とした学校の玄関を初めて見た時の事を話した。

「すぐ気に入ったんだ。学校に入ってすぐ『いい所だな』って思った。大変いい環境だと直感したんだ。」

大迫先生が父を出迎えてくれた。校長先生との対談が終わった頃には父はもう心を決めていた。

「本当に理想的なところだと思ったよ。環境も先生もしっかり整っていた。これならうちの子を託せると感じたよ。」

父が8年前に足を踏み入れた広々とした学校の玄関は、私が毎朝ホームルームに行くのに通る玄関だ。私もとうとう2年もたたないうちに卒業してしまう。

私の姉、慧も5年間千里国際学園に通って、2003年に卒業した。今はオーストラリアのメルボルン大学で演劇を勉強している。

「さくらと慧の今後に関しては全然心配していないよ。」と父はのほほんと言う。

「今まではさくらと慧のために色々なことを決めてあげていたけど、今はもうそうする必要もなくなった。後はしっかりと自立させて自分たちの道を歩みだすのを見守るだけ。」



**Sakura  
(Catherine)**

千里国際学園 (SIS)  
11年生



## キャサリン・ブラウン

英語科 教員

千里国際学園 (SIS)

大阪インターナショナルスクール (OIS)

She studied English and American Literature at Warwick University in the UK. She obtained her postgraduate teaching certification at Leicester University and has a Masters in Japanese Studies from the University of Sheffield. Most recently Catherine has been teaching at a high school in Sydney, Australia. In her free time she enjoys travel and reading.

イギリスのワーウィック大学で英米文学を専攻。レスター大学大学院で教員免許、シエフィールド大で日本学の修士号を取得。オーストラリアの高校でも教鞭をとった。趣味は旅行と読書。

千里国際学園 中等部・高等部

〒652-0032 大阪府箕面市小野原西4-4-16

電話 072-727-5070, FAX 072-727-5055

HP:www.senri.ed.jp, E-mail:admissions@senri.ed.jp



ブラウン先生のクラスの生徒、さくらさんが書いたエッセイです。さくらさん自身が日本語にも訳してくれました。感謝!

エッセイには様々なスタイルがあります。さくらさんが書いてくれたのは、「お父さんの学校選び」をテーマに、お父さんの気持ち・責任を、親子の会話の形式でCreativeに表現したエッセイです。

原文は英語ですが、日本語の訳自体が「国語の作文」として十分鑑賞できます。さくらさんのバイリンガルの力の賜物です。もう一度、感謝! ところで、読者の皆さん。何を考えて、子ども学校を選びますか?